

# 別府溝部学園短期大学自己点検・評価について —平成22年度—

大石 博嗣

The Report of the 2010 Self-Study and Evaluation at  
Beppu Mizobe Gakuen College

Hiroshi Oishi

## はじめに

現在、大学は全入時代を迎え、幅の広い学生層を受け入れるようになっている。向学心・向上心が強く、自らの可能性の発掘、伸長をめざして入学してくれる者が多数を占めているが、一部に目的意識も定かでなく、とりあえず、何となく、入学してきたいる者が存在するのも事実である。

このような中、大学に問われているのが、「教育の質」であり、高等教育機関としての質を確保しつつ、多様な学生のニーズに応え得る教育を創造し、提供しなければならない。特に、教育活動の中核となる授業については、教員が最も意を用いなければならない部分である。中央教育審議会でも、教員が授業内容・方法を改善し、向上させることの必要性を強く指摘しており、学生の学力や意識、受講態度、理解力等を的確に把握して適切な授業を展開しなければならないことはいうまでもない。そして、何事も授業を実施した場合、その過程や結果について分析、評価することが肝要である。いわゆる、PDCAの取り組みの強化を図らなければならない。

授業の評価、分析は、従来、教員の自主的・主体的な活動にゆだねられてきたが、評価の高い客観性や適格性を求め、教員の自己評価に加え学生による評価も重視しなければならない。本学では、平成5年度から委員会を発足させて、学内の自己点検・評価について検討を重ねてきた。12年度からは、全教科を対象に授業評価が開始されて現在に至っており、その結果を基に授業の改善・工夫の努力が行われ、学生生活をより有意義なものにしている。「自立・自活できる人材の育成」をめざし、各授業担当

者が学生の琴線に触れるべく常に創意工夫を凝らした授業創造に努めている。以下、学生による授業評価の結果について検討を加える。

## 1. 調査内容及び手続き

平成22年度の「学生による授業評価」は、「デジタルキャンパス」を利用したシステムでの評価法により、下記の10項目の評価項目について実施した（表1）。

表1 学生による点検項目

- |                      |
|----------------------|
| Q 1 この授業はわかりやすかった    |
| Q 2 学習内容に興味や関心が持てた   |
| Q 3 学習内容の分量は適切だった    |
| Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた  |
| Q 5 教員は熱心に教えていた      |
| Q 6 授業中の学生にも公平に接していた |
| Q 7 いつも集中して聴けた       |
| Q 8 私語をつつしだ          |
| Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた   |
| Q 10 意欲的に取り組んだ       |

教員による自己評価も従来通り下記の10項目で行った（表2）。

表2 教員による自己評価

Q 1 学生は授業を理解した
Q 2 授業の事前準備は、十分おこなった
Q 3 学生の興味・関心を喚起するように心がけた
Q 4 各種教材（視聴覚機器・教科書等）を有効に活用した
Q 5 授業の開始・終了時刻を守った
Q 6 授業中どの学生にも公平に接した
Q 7 出欠確認を適切におこなった
Q 8 授業目的を達成した
Q 9 授業要項（シラバス）の記載内容は現状のままでよい
Q 10 学生のことが理解できた

## 2. 平成22年度授業評価

## 【全体評価】(含留学生)

表1の評価項目を、次の5段階で評価した。

1 とてもそう思う	肯定的評価
2 だいたいそう思う	
3 どちらとも言えない	
4 あまりそう思わない	否定的評価
5まったくそう思わない	

## ・前期

学生の授業評価は、すべての質問項目で「とてもそう思う」が50%を超える。特に、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）は77%で積極的に授業に参加しようとする姿勢が伺える。次いで、Q 5（教員は熱心に教えていた）の71%は教員の姿勢を好意的に受け止めている証であろう。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価レベルでは、Q 5・Q 9の90%をはじめ、いずれも極めて高い数値を示しており、各学科とも、教員の授業及び学生に対する姿勢と学生の心構えが相互に触れあい、自己実現に向けた教育活動が適切に推進されていると考えられる。

教員は、日々、学生の実態を的確に把握し、学生のニーズに合った、そして、学生の将来を見据えた授業創造に積極的に取り組まなければならな

い。教員は、「授業で勝負する」と古くから言われてきた。大学は、「研究」を重要な活動分野としてきたが、近年は「教育」活動の重視が言われ始め、特に授業改善のためのFD活動の活発化が期待されている。本学内において、組織的、系統的な活動は表面だけでは見られないのは残念であるが、教員一人ひとりが、課題意識を持って努力していることが推測され、点から面への拡充を期待したい。

また、学生側に関する肯定的評価は、Q 9以外では、Q 10（意欲的に取り組んだ）が85%となっており、授業にかける熱意が感じられ、教員の姿勢との間で相乗効果の出ている。そして、Q 7（授業の開始・終了時刻を守った）の78%は真摯な態度で授業に臨んでいる現れであり喜ばしいことである。

表4から学科間の特徴を見てみると、肯定的評価では、90%台は食物栄養学科1項目（Q 9）、幼稚教育学科2項目（Q 5・Q 9）、介護福祉学科2項目（Q 5・Q 9）で、昨年度4項目あったライフデザイン総合学科は今年度ゼロである。反面、70%台はライフデザイン総合学科は5項目に及び、他の3学科が1～2項目であることから、学科間落差の存在は多少気になるところである。

ただ、いずれも70%台の後半の数値であり、意見の分かれるところかもしれない。

表3 全体評価（前期）

	とてもそう思う	だいたいそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	54%	25%	11%	6%	3%	1%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	56%	25%	11%	5%	3%	1%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	56%	26%	12%	4%	2%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫を感じられた	59%	22%	11%	4%	3%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	71%	19%	6%	2%	1%	1%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	69%	20%	7%	2%	2%	1%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	51%	27%	14%	5%	2%	1%	100%
Q 8 私語をつしだ	57%	23%	11%	5%	3%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	77%	13%	5%	2%	2%	1%	100%
Q 10 意欲的に取り組んだ	62%	23%	10%	3%	1%	0%	100%

表4 全体評価（前期・学科間比較）

	4 + 5 [肯定的評価]					3					1 + 2 [否定的評価]				
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	78%	79%	81%	80%	79%	11%	10%	12%	11%	11%	11%	11%	6%	8%	9%
Q 2	79%	79%	84%	83%	81%	11%	11%	11%	9%	11%	9%	9%	5%	7%	7%
Q 3	82%	84%	82%	82%	82%	12%	9%	13%	11%	12%	6%	6%	4%	6%	5%
Q 4	79%	80%	81%	86%	81%	12%	10%	13%	8%	11%	8%	8%	5%	6%	7%
Q 5	88%	88%	90%	93%	90%	7%	7%	7%	4%	6%	4%	7%	2%	2%	4%
Q 6	89%	88%	88%	90%	89%	6%	6%	8%	6%	7%	5%	5%	3%	3%	4%
Q 7	77%	80%	77%	78%	78%	13%	12%	17%	12%	14%	8%	7%	5%	8%	7%
Q 8	75%	82%	81%	83%	80%	15%	8%	14%	9%	11%	10%	9%	5%	7%	8%
Q 9	86%	92%	90%	94%	90%	9%	3%	6%	4%	6%	5%	4%	3%	1%	3%
Q 10	82%	85%	85%	86%	85%	11%	10%	11%	9%	10%	6%	4%	3%	5%	5%

一方、否定的評価は、昨年度10%を超える項目はゼロであったが、今年度はライフデザイン総合学科に2項目（Q 1・Q 8）、食物栄養学科に1項目（Q 1）存在する。いずれも、Q 1（この授業はわかりやすかった）が11%であり、全国的に指摘されている学力の低下に起因するものと思われる。大学は高等教育機関として、授業の難易度が上がることは必然であるが、それをいかに分かりやすく教えるか、学生の実情を正しく理解するとともに、一人ひとりの学生を大切にし、効率的・効果的な授業の管理、運営に努力を惜しんではならないと考える。教員が相互に連携を図りつつ、一人の落伍者もださない、魅力ある授業の創造、開かれた授業等々に向け叡智を結集することが重要である。

学生の授業への取り組む姿勢についても、学生の問題であると放置するのではなく、個に応じて学習指導から生活指導にわたり親身になった対応をすることを常に忘れてはならない。確かに、全体的には肯定的評価は高く、満足度の高い授業が提供されていると考えられるが、否定的評価の学生に対しても正当性・妥当性のある内容であれば十分検討して、期待に応え得る改善された授業を提供することが、本学の教育の基本に沿うことになる。

#### ・後期

後期も「とてもそう思う」に関しては、前期に引き続きすべての項目が50%以上である。そし

て、前期に比して下降したのはQ 6（授業中どの学生にも公平に接していた）とQ 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）のみで、それ以外はポイントを上げており、好ましい雰囲気の中で授業が維持されてきていることが思考される。全体平均から見て、肯定的評価ではすべての項目が80%以上となっている。前期に比してポイントをわずかに下げた項目がいくつかあるが、全体的には評価ポイントは現状維持もしくは上昇しており、改善された姿が見られ、意義ある授業が実施され、充実した時間を過ごしていることが推察される。

表5 全体評価（後期）

	とても思う	そう思う	だいいたい	言えないとも	どちらとも思えない	あまりそう	思わない	まったくそう	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	58%	23%	12%	4%	3%	0%	100%			
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	59%	21%	11%	5%	2%	1%	100%			
Q 3 学習内容の分量は適切だった	60%	23%	12%	3%	1%	1%	100%			
Q 4 教員の教え方に工夫を感じられた	62%	21%	10%	4%	2%	1%	100%			
Q 5 教員は熱心に教えていた	71%	18%	7%	2%	1%	1%	100%			
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	68%	20%	8%	2%	1%	1%	100%			
Q 7 いつも集中して聴けた	57%	24%	12%	4%	2%	1%	100%			
Q 8 私語をつしだ	62%	20%	10%	4%	2%	1%	100%			
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	76%	13%	7%	2%	2%	1%	100%			
Q 10 意欲的に取り組んだ	65%	20%	10%	3%	2%	1%	100%			

表6 全体評価（後期・学科間比較）

	4+5 [肯定的評価]				3				1+2 [否定的評価]						
	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均	ライフ	食物	幼教	介護	平均
Q 1	84%	80%	80%	80%	81%	11%	11%	13%	13%	12%	5%	9%	7%	7%	7%
Q 2	84%	79%	82%	79%	81%	9%	12%	13%	12%	12%	6%	8%	5%	8%	7%
Q 3	88%	84%	79%	79%	82%	8%	9%	16%	15%	12%	3%	6%	4%	5%	5%
Q 4	85%	81%	83%	83%	83%	9%	11%	11%	11%	10%	5%	8%	5%	6%	6%
Q 5	91%	90%	87%	87%	89%	7%	6%	9%	7%	7%	2%	6%	2%	4%	3%
Q 6	92%	89%	86%	83%	88%	5%	6%	9%	11%	8%	2%	4%	3%	5%	3%
Q 7	84%	81%	82%	76%	81%	10%	11%	14%	14%	12%	5%	7%	3%	8%	6%
Q 8	84%	82%	83%	80%	82%	10%	9%	13%	11%	11%	5%	8%	3%	8%	6%
Q 9	84%	92%	87%	89%	88%	10%	3%	9%	7%	7%	5%	4%	3%	3%	4%
Q10	85%	85%	89%	82%	85%	10%	8%	9%	11%	10%	5%	6%	2%	6%	5%

否定的評価についても、いずれの項目も10%未満で、前期に比して数値も減少している。前期2学科計3項目あった10%台もゼロになり、全体平均値も6項目にわたり数値の低下がみられる。教員の熱心な指導態度に学生の共鳴度は一段と増し、活力ある授業が教員、学生双方の真摯な態度により維持され、前期よりも評価が上昇するのが本学の特色とするところであり、今年度もその姿が保持されたことは賞賛に値するものである。

肯定的評価に関して学科別に見ると、他学科に比して若干厳しい評価が出ていたライフデザイン総合学科での大幅な改善の姿が見られる。後期では、前期70%台の5項目を含め10項目すべてが80%以上に改善され、Q 5（教員は熱心に教えていた）とQ 6は90%台の大台に乗せることができている。Q 9が前期の86%から84%に低下した以外はすべて評価値を上昇させている。

一方、前期にかなり高い肯定的評価を出していた幼児教育学科は5項目、介護福祉学科は9項目が評価値を下げている。前期では、2学科とも存在していた90%台が一つもなくなり、少々残念であるが、いずれも79%以上の評価値であり、課題は少ないものと思われる。食物栄養学科は、変化が少なく、前期同様の授業環境が維持されているものと思われる。

否定的評価では、当然の結果として、各学科とも数値は低下しており、5%以下が総計で前期の11項目から14項目に増加している。

以上のことから、今年度も学生の授業に対する

満足度はかなり高いレベルで推移してきたものと思われる。幅の広い学生層に的確に対面し、適切な授業の提供に意を用いた教員の努力の賜であろう。

この結果に胡座をくむことなく、教える立場の教員は、常に、自らの授業を冷静に見つめ、学生の実態に即したものになっているか、学習者を中心据えた授業になっているか等、シビアな自己評価・授業評価を行い、真摯な態度で授業改善に取り組むことが必要であろう。その際、個人として授業研究を行うことはもちろん重要であるが、学科やグループ等で組織的に研究活動を行い、PDCAの継続的取り組みが大切であると考える。

そして、「どちらとも言えない」の項目の数値が低いことは、学生がまじめに本評価に取り組んでいる証であり、信頼性を示すものと言える。

以下、学科・学年ごとに考察を加えることにする。ただし、中国からの留学生については、学科の枠を取り扱って学年単位でまとめて集計している。

#### 【学科別評価】

##### 1. ライフデザイン総合学科1年

###### ・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」について、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）67%、Q 6（授業中どの学生にも公平に接していた）64%、Q 5（教員は熱心に教えていた）59%以外の7項目はいずれも50%を割るというやや厳しい結果である。特に、Q 7（いつも集中して聴けた）

は37%で、他に類を見ない厳しい結果である。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価レベルでも70%を超えない項目が3項目もあることは問題があり、今回の結果を客観的に分析し、次年度に向けて改善策を講ずるべきであろう。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）では、5項目（Q1・2・4・7・8）が10%台の数値を示しているのも他学科ではあまり類を見ない現象である。Q8（私語をつつしだ）14%は、学生は自らの授業態度を反省しなければならないが、Q1（この授業は分かりやすかった）14%、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）12%については、授業内容に起因するものであれば問題である。学生の学力や意欲、関心等を多面的かつ客観的に分析し、心を揺さぶる授業の創造に知恵を出し合わなければならない。昨年度（限1年生）は極めて高い評価結果をだしていることでもあり、組織力を活かした取組を期待したい。学生自身も、予習・復習の時間を十分確保して、指導者の期待に応え得る姿勢を確立しなければならない。

表7-1 ライフデザイン総合学科1年（前期）

	とても思う	そう思う	だいたい思う	見えないどちらとも	思わない	あまりない	思つたくない	思つたくそう	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	44%	26%	17%	10%	4%	0%	100%			
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	46%	26%	16%	7%	5%	0%	100%			
Q3 学習内容の分量は適切だった	47%	26%	19%	6%	2%	0%	100%			
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	45%	24%	20%	7%	3%	1%	100%			
Q5 教員は熱心に教えていた	59%	26%	10%	4%	1%	0%	100%			
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	64%	24%	6%	3%	2%	0%	100%			
Q7 いつも集中して聴けた	37%	32%	19%	7%	4%	1%	100%			
Q8 私語をつつしだ	41%	23%	21%	9%	5%	1%	100%			
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	67%	13%	13%	4%	2%	0%	100%			
Q10 意欲的に取り組んだ	47%	27%	17%	5%	3%	0%	100%			

#### ・後期

前期同様に、「とてもそう思う」で70%以上となっているのはゼロであるが、Q7（いつも集中して聴けた）が前期の37%から46%へとアップし

たのはじめ、他の9項目はいずれも50%以上となり、改善の傾向が見られる。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、前期は60%台の3項目も改善されて70%以上となっている。中でも、Q5（教員は熱心に教えていた）とQ6（授業中どの学生にも公平に接していた）は前期に引き続き各々88%、89%の高率を示している。この2項目に加え、Q3（学習内容の分量は適切であった）が82%となっている。いずれも教員側に関する項目であり、教員の授業に対する真剣かつ熱意ある指導姿勢を誠実に受け止めている姿が伺える。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）に関しては、10%を超える項目が前期の5項目（Q1・2・4・7・8）から1項目（Q1）へと激減している。このことは、教える側の教員の努力の賜であると思われるとともに、学生もそれに応え、自己評価も適切に行われ、自己改革への取組が誠実になされた結果であろう。また、入学して半年が経過し、学生としての本分を自覚し始めた成長の姿でもある。次年度も、この流れで取り組まれることを祈念する。

表7-2 ライフデザイン総合学科1年（後期）

	とても思う	そう思う	だいたい思う	見えないどちらとも	思わない	あまりない	思つたくない	思つたくそう	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	50%	27%	16%	4%	4%	0%	100%			
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	21%	14%	7%	3%	1%	100%			
Q3 学習内容の分量は適切だった	55%	27%	13%	3%	1%	0%	100%			
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	25%	14%	5%	2%	0%	100%			
Q5 教員は熱心に教えていた	65%	23%	9%	1%	1%	1%	100%			
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	63%	26%	6%	2%	1%	1%	100%			
Q7 いつも集中して聴けた	46%	29%	16%	6%	2%	1%	100%			
Q8 私語をつつしだ	50%	24%	16%	7%	2%	1%	100%			
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	68%	10%	15%	5%	2%	1%	100%			
Q10 意欲的に取り組んだ	52%	26%	16%	4%	2%	0%	100%			

#### 2. ライフデザイン総合学科2年

##### ・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して70%以上を示した項目はゼロではあるが、

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価ではQ3（学習内容の分量は適切だった）81%、Q5（教員は熱心に教えていた）83%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）84%、Q9（遅刻・欠席がないよう心がけた）83%、Q10（意欲的に取り組んだ）80%といずれの項目も高率となっている。その他の項目でも、肯定的評価ではいずれも70%台をキープしており、指導者の熱心な態度や創意工夫された授業に学生が的確に反応し、活力ある授業が展開されていることが推察される。

1年前の同期でも同じような結果がみられており、年月が経ても好ましい姿が持続されていることは喜ばしい限りである。

ただ、否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）では、Q1（この授業はわかりやすかった）が13%となっており、授業内容に戸惑いを見せていている学生がいることを見過ごしてはならないだろう。そして、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）11%は授業に対する不満の現れであり、その結果、Q7（いつも集中して聴けた）10%に影響を与えていたとも考えられる。

教員の熱心な指導態度は高く評価されているのだから、分かりやすい授業の工夫・改善に積極的に取り組み、魅力ある授業の創造に努めてなければならない。

表8-1 ライフデザイン総合学科2年（前期）

	とても思う	どう思う	どちらとも言えない	思わない	あまりない	思わないくそ	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	53%	22%	12%	6%	7%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	21%	14%	6%	4%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	57%	24%	12%	5%	2%	0%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	56%	20%	11%	5%	6%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	63%	20%	9%	5%	3%	1%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	66%	18%	10%	3%	3%	1%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	48%	25%	15%	6%	4%	1%	100%	
Q8 私語をつつしだ	53%	25%	14%	5%	2%	1%	100%	
Q9 遅刻・欠席がないよう心がけた	66%	17%	11%	5%	2%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	60%	20%	12%	6%	2%	1%	100%	

#### ・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して70%が前期のゼロから3項目へと増加し、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価ではすべての項目が80%以上となり、前期に比して大幅に改善されていることは喜ばしいかぎりである。特に高い項目は、Q8（私語をつつしだ）の91%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）の89%、Q5（教員は熱心に教えていた）の87%である。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）もほとんどの項目が5%以下であり、特に、Q9（遅刻・欠席がないよう心がけた）は0%となっており、授業に対する満足度は一段と上昇しているものと推察される。学生は、ファッションショーや卒業制作展などの作品製作に葛藤しつつも精力的に取組み、その過程、結果で得た感動、感激が高評価に繋がっているものと思われる。体験型学習の効果を改めて確認できる。

学生のニーズに応えるべく常に授業改善に意を用いるなど、熱心な教員の指導姿勢に学生も適切に反応し、遅刻・欠席をなくし、私語を慎むなど自己を律しつつ授業に取り組んでいる姿勢が推察され、社会の有為なる人材として今後も前向きに努力してもらいたい。

表8-2 ライフデザイン総合学科2年（後期）

	とても思う	どう思う	どちらとも思えない	思わない	あまりない	思わないくそ	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	67%	17%	11%	3%	3%	0%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	67%	18%	9%	3%	2%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	71%	15%	9%	3%	1%	1%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	67%	17%	9%	4%	1%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	73%	14%	10%	2%	0%	1%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	76%	13%	7%	1%	1%	2%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	59%	27%	9%	2%	1%	1%	100%	
Q8 私語をつつしだ	65%	26%	8%	0%	0%	0%	100%	
Q9 遅刻・欠席がないよう心がけた	66%	15%	10%	5%	3%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	67%	17%	9%	4%	2%	1%	100%	

### 3. 食物栄養学科1年

#### ・前期

調査項目10項目の中で、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が、「とてもそう思う」で82%の極めて高い評価を示し、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では95%の最高値となっている。この他に、肯定的評価が80%以上になっている項目は、Q5（教員は熱心に教えていた）とQ6（授業中どの学生にも公平に接していた）87%、Q10（意欲的に取り組んだ）85%、Q8（私語をつつしだ）84%、Q3（学習内容の分量は適切であった）82%で、例年並みの高評価となっている。

学生は、授業に臨む教員の熱心な姿勢を好意的に捉え、自らも誠実に授業を受けようとしている姿勢が伺え、教員と学生との円満な関係が維持されていることが推察される。

しかし、否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）ではQ1（この授業はわかりやすかった）12%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）10%となっていることは看過してはいけない。授業や教員に対する不満は、授業への集中度を引き下げるなど様々な方面に影響を与えることも考えられ、課題を残す結果である。

学生の実態を的確に把握し、学生側の肯定的評価の高評価を損なうことなく、学習者を主体にし

た授業創造に叡智を結集しなければならない。教える側の到達目標値を適正に設置し、興味、関心が沸き、分かりやすい授業をどのように創造していくべきか、授業改善に向けた組織的な取り組みを期待したい。

#### ・後期

肯定的評価（とてもそう思う+だいたいそう思う）に関して、80%を超える項目は、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）の93%をはじめ、Q5（教員は熱心に教えていた）の89%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）の87%、Q10（意欲的に取り組んだ）の84%、Q8（私語をつつしだ）の81%、Q3（学習内容の分量は適切であった）の80%となっており、前期とほぼ同様の水準を維持している。

教員の熱心な指導態度に学生が応え、良い雰囲気の中で授業が運営され、学生生活に充実感を与えていると推察される。一人ひとりの人格を尊重しつつ、学生集団が持つパワーを大切にしながら、活力のある授業が一層推進されることを期待したい。

しかし、前期にはみられなかった「とてもそう思う」50%以下が、後期には5項目にも及んでいる。肯定的評価でも、前期に比して6項目が数値を低下させている。

表9-1 食物栄養学科1年（前期）

	とても思う	どちらとも思わない	どちらとも思っていない	思わない	思はない	思はない	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	52%	23%	12%	7%	5%	0%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	51%	25%	14%	5%	4%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	51%	31%	11%	4%	2%	1%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	50%	25%	14%	6%	4%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	65%	22%	9%	2%	1%	1%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	65%	22%	9%	2%	2%	0%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	51%	26%	15%	4%	3%	1%	100%	
Q8 私語をつつしだ	65%	19%	10%	3%	1%	1%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	82%	13%	2%	1%	2%	0%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	61%	24%	11%	2%	2%	0%	100%	

表9-2 食物栄養学科1年（後期）

	とても思う	どちらとも思わない	どちらとも思っていない	思わない	思はない	思はない	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	46%	27%	15%	7%	4%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	49%	26%	15%	6%	4%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	44%	36%	13%	5%	2%	1%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	46%	29%	15%	6%	3%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	63%	26%	6%	2%	1%	1%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	59%	28%	7%	2%	1%	2%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	49%	28%	16%	5%	1%	0%	100%	
Q8 私語をつつしだ	58%	23%	11%	5%	2%	1%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	80%	13%	3%	1%	2%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	61%	23%	11%	3%	1%	0%	100%	

否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）では2項目が10%台となっており、Q1（この授業はわかりやすかった）の11%、Q2（学習内容に興味や関心がもてた）の10%は、いずれも教員側に関する項目であり冷静に直視しなければならない。

学生生活にも馴染み、資格取得等目的意識も固まることに平行して評価値は上昇するのが例年の姿であるが、何故にこのような結果となったのか分析が必要であろう。学生一人ひとりを大切に、学生の実態に即した、学生のニーズを適切に把握した授業の運営に創意と工夫を講じなければならぬ。

#### 4. 食物栄養学科2年

##### ・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関してQ9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が84%の高率を示し、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）の77%を最低にして、ほとんどが80%を超えている。教員の授業にのぞむ姿勢や授業運営に学生は満足感を味わい、自身の態度もそれに応えようと努力している姿が伺える。昨年の後期にもこのような好結果がでており、2年次に進級しても維持されていることは喜ばしいことである。

しかし、否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）で、10%弱の項目が教員側の項目にいくつか見られることに着目すべきであろう。Q2（学習内容に興味や関心が持てた）9%、Q1（この授業はわかりやすかった）8%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）8%については、速やかに検討を加えることが必要であろう。2年次生になり、専門科目が大幅に増加して、それも馴染み難い理系的科目が増えれば、難易度も上がり、理解がなかなか進まず、興味、関心も減退することもある。しかし、指導者はそれを乗り越えて学力の維持伸展に努めなければならない。学生の実態を的確に捉え、実態に即した創意工夫された授業を構築し、目標水準の達成に努めなければならないと考える。

学生も、興味、関心が沸かないのはわかり難い授業等が原因なのか、それとも、授業に臨む準備や心構え等自分自身の責に属するのか冷静かつ客

表10-1 食物栄養学科2年（前期）

	とても思 う	そう思 う	だい そう思 う	言 え ない	ど ち ら ど も	思 わ な い	あ ま り そ う	思 わ な い	ま つ た く そ う	無 回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	54%	25%	12%	4%	4%	4%	1%	1%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	54%	23%	12%	6%	3%	1%	1%	1%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	60%	24%	10%	4%	2%	1%	1%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	61%	22%	9%	4%	4%	1%	1%	1%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	71%	18%	6%	2%	2%	2%	2%	2%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	72%	19%	5%	2%	3%	1%	1%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	56%	24%	12%	4%	3%	1%	1%	1%	100%		
Q8 私語をつしだ	72%	14%	6%	3%	2%	2%	2%	2%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	84%	9%	3%	2%	1%	1%	1%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	65%	19%	12%	2%	2%	1%	1%	1%	100%		

観的な検討が必要である。

##### ・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が前期に引き続いて83%の高水準を維持し、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、Q2（学習内容に興味や関心が持てた）の79%以外はすべて80%以上の高い評価値を示していることは、喜ばしいことである。

教員の授業に対する姿勢や日々工夫された授業運営、時機を得た指導助言等々に学生は誠実に応え、遅刻や欠席をせず、真面目に授業を受けようと努力している姿が伺える。

しかし、前期には見られなかっただ否定的評価10%台が2項目発生したことは問題である。教員側に関係するQ1（この授業はわかりやすかった）と、学生側に関係するQ7（いつも集中して聴けた）がいずれも10%となり、全体的な高評価の中で水を差す結果となっている。

指導者の熱心さは引き続いで評価されており、師弟関係は良好な関係であると思考されるので、授業の内容や構成、進め方等は教える側の責任において工夫すべきである。学生の実態を的確に把握し、それに即した、魅力ある授業の創造に組織的な取り組みが必要であろう。ただ、安易に教え

る内容を低くすることでわかりやすい授業にすることは避けなければならない。教材・教具を工夫し、教授方法の改善を図ること等により、学生の授業への興味・関心を高め、理解度を深めることができ大事である。学生自身も冷静に自己評価し、常に向上心を持ち続けることを期待する。

表10-2 食物栄養学科2年（後期）

	とても思う	そう思う	どちらとも思えない	思わない	あまり思わない	思つたくない	そう	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	57%	24%	9%	5%	5%	1%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	24%	12%	6%	3%	0%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	58%	27%	9%	4%	2%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	60%	22%	9%	5%	4%	0%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	69%	18%	8%	2%	2%	1%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	67%	20%	6%	4%	2%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	57%	24%	9%	6%	4%	1%	100%		
Q8 私語をつつしだ	66%	18%	7%	4%	3%	1%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	83%	9%	4%	2%	1%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	68%	16%	7%	5%	3%	1%	100%		

## 5. 幼児教育学科1年

### ・前期

調査項目10項目の中で、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）では73%の学生が「とてもそう思う」と答え、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると90%の最高値となっている。

「とてもそう思う」段階で、Q7（いつも集中して聴けた）39%、Q3（学習内容の分量は適切であった）45%、Q1（この授業はわかりやすかった）47%、Q8（私語をつつしだ）48%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）49%と、かなりの低水準での評価が昨年度同様今年度も見られるのは注意を要する。しかし、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、いずれの項目も70%を超えているのは救いである。

肯定的評価で、Q9に続いて高い評価を示しているのは、Q5（教員は熱心に教えていた）89%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）87%、Q10（意欲的に取り組んだ）83%、Q2（学

習内容に興味や関心が持てた）82%の4項目が挙げられる。教員及び学生側双方の項目で高い評価点になっているのは、相互の信頼関係が確実に確保されている証であろう。

ただ、極一部ではあるが授業が理解できにくく、興味がわかないで苦労している学生の存在が推測される。一人ひとりを大切に、自己実現が成し遂げられる力の育成に更なる努力を傾注することを期待したい。そして、Q7で「どちらとも言えない」が他に類を見ない20%であり、学習内容に興味・関心があるのに何故なのか大きな疑問であり、原因究明が必要である。

表11-1 幼児教育学科1年（前期）

	とても思う	そう思う	どちらとも思えない	思えない	あまり思わない	思つたくない	そう	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	47%	32%	13%	6%	2%	0%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	50%	32%	12%	5%	1%	1%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	45%	34%	15%	4%	1%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	49%	29%	16%	4%	2%	0%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	65%	24%	8%	2%	0%	2%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	64%	23%	9%	2%	1%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	39%	33%	20%	5%	1%	1%	100%		
Q8 私語をつつしだ	48%	31%	15%	5%	1%	1%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	73%	17%	6%	2%	2%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	57%	26%	12%	3%	1%	1%	100%		

### ・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」で70%以上の項目が、前期の1項目からゼロへ、5項目存在していた50%以上も3項目へとし、Q9（遅刻、欠席がないよう心がけた）の59%が最高値である。しかし、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価では、いずれも70%以上であり、Q10（意欲的に取り組んだ）が86%、Q9が84%、Q5（教員は熱心に教えていた）が83%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）が82%である。

前期に比して、「とてもそう思う」に関して、Q1～10のすべての項目が評価を下げ、肯定的評価レベルでも7項目が低下していることは重く受

け止めなければならない。評価姿勢が厳格で、客観的に分析しているとも思考されるが、昨年度の1年次生も同様な傾向を示しており、学生生活に慣れ、緊張感の緩んだ生活に浸りつつある危険信号とも考えられ、客観的、多面的な検討が必要であろう。

教員側の評価項目結果からは、公平で熱心な教員の指導姿勢は高く評価され、信頼も寄せられていると思われる所以、学生の実態を客観的に分析し、それに即した授業の運営管理に努めなければならない。学生の学習意欲や遅刻・欠席をしない心がけ等はかなり高い水準であると推測されるので、一人ひとりの学生理解を深め、分かりやすく、興味・関心を喚起する授業の実施に向け一層の工夫を重ね、学生の熱い期待に応える授業を確立することを期待したい。

表11-2 幼児教育学科1年（後期）

	とても思う	どちら思う	言えないとも	思わないとも	思つたくないそ	う	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	38%	36%	16%	6%	3%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	40%	36%	17%	3%	2%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	39%	34%	21%	4%	1%	1%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	42%	35%	15%	4%	2%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	55%	29%	12%	2%	0%	2%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	51%	31%	13%	3%	1%	1%	100%	
Q7 いつも集中して聽けた	37%	40%	19%	2%	1%	1%	100%	
Q8 私語をつつしだ	47%	31%	17%	2%	1%	2%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	59%	25%	12%	3%	1%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	48%	38%	11%	2%	1%	1%	100%	

## 6. 幼児教育学科2年

### ・前期

調査項目10項目の中で、すべての項目にわたり肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)が80%を超えており、中でも、Q5(教員は熱心に教えていた)93%、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)92%、Q6(授業中どの学生にも公平に接していた)・Q10(意欲的に取り組んだ)88%の高い評価が見られる。やや厳しい評価が

見られた1年前に比して大幅な改善であり、時間の経過とともに着実に成長を遂げている証である。感動を味わうことの多い体験型学習が多いことに加え、教員の熱意ある姿勢を学生が真正面から受け止め、相互の信頼関係が確立されている証であろう。

このような結果から、否定的評価(あまりそう思わない+まったくそう思わない)で10%を超える項目は1つもなく、Q1(この授業はわかりやすかった)の5%が最も高い数値である。以下、Q3(学習内容の分量は適切であった)・Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)が4%となっており、好ましい師弟環境の下で相当高い満足度の授業が維持されているものと思われる。

ただ、昨年度同期には「とてもそう思う」で存在していた70%台が、今期一つもなかったことは残念である。昨年度、40%台が1項目のみであったが今年度は3項目となっている。より高い教育水準をめざし、個に応じたきめ細かい支援、創意工夫ある授業の取り組みを期待したい。

表12-1 幼児教育学科2年（前期）

	とても思う	どちら思う	言えないとも	思わないとも	思つたくないそ	う	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	47%	35%	13%	4%	1%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	55%	32%	10%	2%	0%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	51%	34%	11%	2%	2%	0%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	54%	30%	11%	3%	1%	0%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	69%	24%	7%	0%	0%	0%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	61%	27%	8%	1%	0%	2%	100%	
Q7 いつも集中して聽けた	44%	38%	16%	2%	0%	0%	100%	
Q8 私語をつつしだ	48%	33%	14%	3%	0%	1%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	66%	26%	6%	1%	0%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	53%	35%	10%	1%	0%	1%	100%	

### ・後期

改善の必要性が少なかった前期の評価結果であったが、後期は一段と評価を高めている項目が多数みられる。肯定的評価(とてもそう思う+だいたいそう思う)は全項目とも80%を超え、90%台

も前期2項目から6項目へと増加している。Q5(教員は熱心に教えていた)の93%をはじめQ6(授業中どの学生にも公平に接していた)・Q10(意欲的に取り組んだ)の92%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)・Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)・Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)の91%であり、教員の姿勢は好意的に受け止められ、極めて良好な環境の中で授業が運営されていると思われる。

「とてもそう思う」に限定しても、前期存在しなかった70%台が、Q5の79%をはじめ、Q4が74%、Q6が72%、Q9が71%を示しているなど、すべての項目で大幅な上昇をみせている。平素からの組織的かつ継続的な努力、工夫の賜であろう。

一方で、否定的評価(あまりそう思わない・まったくそう思わない)に関しては、当然のごとく前期から一段と数値は減少(好転)しており、Q5・Q6・Q9は0%で、他の項目も4%以下の極めて小さな数値となっている。

このような結果は、昨年度も同様の姿がみられており、本学科の特色とするところである。教員の熱意ある姿勢を学生も真正面から受け止め、相互の信頼関係が確保され、良好な師弟関係が維持・発展されていることを示している証である。

表12-2 幼児教育学科2年(後期)

	とても思う	さう思う	どちらとも言えない	どちらとも思わない	思わない	思わないうそ	思わないうそ	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	63%	26%	8%	2%	1%	0%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	66%	25%	7%	1%	1%	0%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	66%	21%	8%	3%	1%	0%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	74%	17%	5%	2%	1%	0%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	79%	14%	4%	0%	0%	3%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	72%	20%	7%	0%	0%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	61%	27%	10%	1%	1%	1%	100%		
Q8 私語をつつしんだ	60%	23%	13%	2%	1%	1%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	71%	20%	8%	0%	0%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	65%	27%	6%	1%	0%	0%	100%		

## 7. 介護福祉学科1年

### ・前期

調査項目10項目の中で、Q9(遅刻、欠席がないよう心がけた)とQ5(教員は熱心に教えていた)の項目で、「とてもそう思う」に関して、それぞれ90%と81%の極めて高い評価がでている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、それぞれ97%と93%となっている。

「とてもそう思う」段階では71%であったQ6(授業中どの学生にも公平に接していた)も、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると91%の大台となり、教員の授業に対する姿勢に学生は極めて高い評価を与えている。

これらの項目に続いて、肯定的評価の高い項目として、Q10(意欲的に取り組んだ)89%、Q2(学習内容に興味や関心が持てた)・Q4(教員の教え方に工夫が感じられた)86%、Q8(私語をつつしんだ)85%を含めすべての項目が80%以上の高評価となっている。

教員の熱意ある姿勢と学生の意欲がうまくかみあつた好ましい状況の下で授業が進められているものと思われる。

一方、否定的評価の結果から、一部ではあるが授業に興味が持てず、理解できないで過ごしている学生の存在も推察される。資格取得のために、それ相応の授業水準が要求されるが、学生の

表13-1 介護福祉学科1年(前期)

	とても思う	さう思う	どちらとも言えない	どちらとも思わない	思わない	思わないうそ	思わないうそ	無回答	
Q1 この授業はわかりやすかった	53%	27%	12%	5%	2%	1%	100%		
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	58%	28%	8%	4%	2%	1%	100%		
Q3 学習内容の分量は適切だった	56%	26%	12%	4%	1%	1%	100%		
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	67%	19%	8%	4%	1%	1%	100%		
Q5 教員は熱心に教えていた	81%	12%	4%	1%	0%	1%	100%		
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	71%	20%	6%	3%	1%	1%	100%		
Q7 いつも集中して聴けた	59%	23%	10%	5%	2%	1%	100%		
Q8 私語をつつしんだ	63%	22%	8%	5%	1%	1%	100%		
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	90%	7%	1%	1%	0%	1%	100%		
Q10 意欲的に取り組んだ	69%	20%	7%	3%	1%	1%	100%		

実態を的確に把握し、個を大切にした、分かりやすい授業の創造に向けて更なる叡智の結集を期待したい。

#### ・後期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」に関して、Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が75%で、前期に引き続き高い水準が維持されている。これに続くのがQ 5（教員は熱心に教えていた）の66%とQ 10（意欲的に取り組んだ）60%である。

「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価でも、Q 9は88%、Q 5は86%、Q 6とQ 10は80%となっている。残りの項目もすべて70%以上であり喜ばしいことである。分け隔てなく、熱心に教える教員の姿勢に魅力を感じ、それに応えるべく遅刻や欠席をせず、意欲をもって授業に臨もうとする真摯な学生の姿が推察される。

しかし、前期の高い評価の反動なのか、それとも冷静に自己評価した結果なのか、「とてもそう思う」及び「だいたいそう思う」の両段階とも後期にはすべての項目にわたり評価が低下している。特に、Q 4・Q 5・Q 6・Q 7・Q 9の5項目は10ポイント以上の大幅な低下がみられるることは残念である。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそ

う思わない）でも、Q 2（学習内容に興味や関心が持てた）・Q 7（いつも集中して聴けた）・Q 8（私語をつしだした）が10%となっており、10%以上は皆無であった前期から考えるとかなり厳しい結果である。学生生活になじみ、前期の緊張感が緩み、学習意欲の後退が懸念される。学生の実態を的確に把握して、分かりやすく、興味・関心が喚起される授業改善への取り組みを期待したい。

## 8. 介護福祉学科2年

#### ・前期

調査項目10項目の中で、「とてもそう思う」では、Q 5（教員は熱心に教えていた）とQ 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）がいずれも72%の高い評価となっている。「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、90%以上が1項目、80%台が4項目で、残りもすべて70%以上であり好ましい状況であるといえる。肯定的評価の中で特に高かった項目は、Q 5の92%をはじめQ 6（授業中どの学生にも公平に接していた）の89%、Q 9の86%、Q 4（教員の教え方に工夫が感じられた）の85%である。

教員の授業に臨む姿勢には好感を持ち、それに応えるべく遅刻・欠席がないように努力している姿が確認されるとともに、教員と学生間の信頼関係の下、充実した授業環境が維持継続されている

表13-2 介護福祉学科1年（後期）

	とても思 う	と う 思 う	だ い た い 思 う	言 え な ど も	ど ち ら ど も	思 わ な い そ う	あ ま り な い そ う	思 わ な い そ う	ま つ た く そ う	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	47%	28%	16%	5%	3%	0%	100%				
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	47%	27%	15%	7%	3%	1%	100%				
Q 3 学習内容の分量は適切だった	47%	27%	18%	5%	2%	1%	100%				
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	51%	26%	14%	5%	3%	1%	100%				
Q 5 教員は熱心に教えていた	66%	20%	9%	4%	2%	1%	100%				
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	57%	23%	13%	3%	3%	1%	100%				
Q 7 いつも集中して聴けた	48%	24%	15%	6%	4%	2%	100%				
Q 8 私語をつしだした	54%	22%	12%	6%	4%	1%	100%				
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	75%	13%	7%	2%	1%	1%	100%				
Q 10 意欲的に取り組んだ	60%	20%	13%	5%	3%	0%	100%				

表14-1 介護福祉学科2年（前期）

	と う 思 う	と う 思 う	だ い た い 思 う	言 え な ど も	ど ち ら ど も	思 わ な い そ う	あ ま り な い そ う	思 わ な い そ う	ま つ た く そ う	無 回 答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	52%	26%	11%	8%	2%	1%	100%				
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	53%	23%	12%	8%	3%	1%	100%				
Q 3 学習内容の分量は適切だった	52%	30%	10%	6%	1%	1%	100%				
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	58%	27%	8%	3%	3%	1%	100%				
Q 5 教員は熱心に教えていた	72%	20%	5%	1%	1%	1%	100%				
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	67%	22%	7%	2%	0%	2%	100%				
Q 7 いつも集中して聴けた	40%	30%	18%	9%	2%	1%	100%				
Q 8 私語をつしだした	48%	31%	11%	7%	2%	1%	100%				
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	72%	14%	10%	2%	1%	1%	100%				
Q 10 意欲的に取り組んだ	48%	30%	14%	6%	2%	0%	100%				

ことが伺える。

しかし、否定的評価（あまりそう思わない＋まったくそう思わない）に関しては、10%を超える項目がQ2（学習内容に興味や関心が持てた）・Q7（いつも集中して聴けた）11%、Q1（この授業はわかりやすかった）10%とやや課題を残す結果となっている。極一部ではあるが授業が理解できにくく、興味がわからないで苦労している学生の存在が推測される。学生の実態を的確に把握し、個に応じた授業運営に組織力を活かし、学生一人ひとりの自己実現が成し遂げられるよう組織力を活かした更なる工夫努力を期待したい。

#### ・後期

前期において高い評価が示されていたが、後期になると一段と評価が上がり、他の学科にはみられないハイレベルの結果がみられる。「とてもそう思う」に関して、Q7（いつも集中して聴けた）の69%が最低値で、残りはすべて70～80%台である。特に、Q5（教員は熱心に教えていた）86%、Q4（教員の教え方に工夫が感じられた）85%、Q6（授業中どの学生にも公平に接していた）83%と、高い評価を示している。いずれも教員の授業に臨む姿勢に関するものであり、学生は好意的に見ていることが伺える。前期、Q7・8・10は40%とやや不満を残す結果が見られたが、後期にはいずれも改善されている。

肯定的評価（とてもそう思う+だいたいそう思う）になると、すべての項目が80%以上であり、前述のQ4・Q5・Q6は90%台の驚異的な数値である。創意工夫を凝らし、学生の側に立って、分かりやすい授業の運営に努める等、授業改善に意を用いた努力の賜であろう。

また、体験型の授業が多い学科の特性が十二分に活かされ、職業人としての入り口に近づいた意識の高揚でもあり、学生の意欲、関心等を最大限に引き出している現れでもあると推察される。

1年次に比して、各項目とも大幅に評価を上げており、学生の自己実現が確実に進展しつつあることを信じる。

否定的評価（あまりそう思わない+まったくそう思わない）に関しては、ほとんどの項目が5%以下であり、好ましい状況である思われる。

表14-2 介護福祉学科2年（後期）

	とても思う	どちらとも思わない	どちらとも思えない	どちらとも思ふ	あまり思わない	思わない	思つたくない	無回答
Q1 この授業はわかりやすかった	73%	15%	8%	3%	0%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	75%	14%	7%	4%	0%	0%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	77%	10%	9%	3%	0%	1%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	85%	8%	5%	1%	0%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	86%	6%	3%	2%	0%	3%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	83%	8%	6%	2%	0%	1%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	69%	13%	11%	5%	0%	2%	100%	
Q8 私語をつしだ	71%	15%	7%	4%	1%	2%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	77%	12%	5%	3%	1%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	71%	15%	9%	4%	0%	0%	100%	

## 9. 留学生1年

#### ・前期

言葉に不安を抱きつつ、夢を追い、学習意欲に燃えてスタートした日本での大学生活だが、かなり満足度の高い学生生活を過ごしているようである。「とてもそう思う」に限定しても、すべての項目が80%以上で、「だいたいそう思う」を含めた肯定的評価になると、90%後半から100%へと上昇

表15-1 留学生1年（前期）

	とても思う	どちらとも思わない	どちらとも思えない	どちらとも思ふ	あまり思わない	思わない	思つたくない	無回答
Q1 この授業はわかりやすかった	85%	12%	0%	0%	1%	1%	100%	
Q2 学習内容に興味や関心が持てた	90%	7%	0%	0%	0%	1%	100%	
Q3 学習内容の分量は適切だった	93%	5%	0%	0%	0%	2%	100%	
Q4 教員の教え方に工夫が感じられた	94%	4%	0%	0%	0%	1%	100%	
Q5 教員は熱心に教えていた	95%	3%	1%	0%	0%	1%	100%	
Q6 授業中どの学生にも公平に接していた	90%	7%	1%	0%	1%	2%	100%	
Q7 いつも集中して聴けた	92%	7%	0%	0%	0%	1%	100%	
Q8 私語をつしだ	89%	6%	1%	0%	4%	1%	100%	
Q9 遅刻、欠席がないよう心がけた	95%	3%	0%	0%	1%	1%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	95%	5%	0%	0%	0%	0%	100%	

している。不自由な会話環境の中でありながら、教員と学生の意思疎通が十二分に出来て、厚い信頼関係の下で授業がなされている証であろう。当然のこととして、否定的評価は極めて小さい値となっている。

ほとんどの留学生が満足していると考えられるが、文化や価値観等々が大きく異なるので、ミスマッチも生じやすいことに思いを馳せ、日本人学生に対する以上に一人ひとりの留学生理解に注意を払わなければならない。留学生の期待に応え得る、内容の充実した授業を維持するため更なる創意工夫を重ね、日中友好の絆を強めるためにも、全学挙げて努力しなければならない。

#### ・後期

後期も、前期同様に高い評価が見られ、すべての項目で「とてもそう思う」が99～100%となっている。数値を見る限りにおいては、問題点はないものと思われる。

日本での生活にも馴染み、落ち着いて学習に専念できるようになり、その結果、学習に対する熱い思いが一段と高まったものと思われる。そして、熱意ある教員の姿勢が留学生にも浸透し、留学生の意欲とうまくかみあい、理想的な授業が行われていると思われる。進度が進むに従って、学力差の拡大等様々な課題も発生するかもしれない

表15-2 留学生1年（後期）

	とても思う	だいたい思う	どちらとも言えない	思わない	思つたくない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	100%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	100%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 8 私語をつしだ	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	98%	0%	0%	0%	0%	1%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	99%	0%	0%	0%	0%	1%	100%

が、今回のような評価が今後も保持されることを期待したい。

## 10. 留学生2年

#### ・前期

1年次生同様に、極めて高い評価となっている。「とてもそう思う」に関して、評価の低い科目でもQ 8（私語をつしだ）の62%が最低であり、次いでQ 7（いつも集中して聴けた）・Q 9（遅刻、欠席がないよう心がけた）が76%である。残りの7項目すべてが80%以上という大変好ましい結果である。教員の熱心な指導や創意工夫された授業に心が揺さぶられ、日本語試験や他大学への進学等目的意識も明確になり、意欲的で充実した学生生活を送っている現れであろう。今後も、このような大変好ましい状況が継続されることを期待したい。ただ、Q 8の項目で、「まったくそう思わない」が15%となっていることを看過してはならないだろう。日本語の上達をめざし、学生自身の内省を促すとともに、教員も厳しい姿勢をもって支援しなければならない。

表16-1 留学生2年（前期）

	とても思う	だいたい思う	どちらとも言えない	思わない	思つたくない	まったくそう思わない	無回答
Q 1 この授業はわかりやすかった	82%	10%	1%	3%	3%	1%	100%
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	82%	12%	3%	1%	3%	0%	100%
Q 3 学習内容の分量は適切だった	86%	8%	2%	1%	2%	1%	100%
Q 4 教員の教え方に工夫が感じられた	86%	8%	1%	1%	2%	1%	100%
Q 5 教員は熱心に教えていた	85%	7%	2%	1%	2%	2%	100%
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	85%	8%	2%	1%	3%	1%	100%
Q 7 いつも集中して聴けた	76%	14%	3%	2%	3%	3%	100%
Q 8 私語をつしだ	62%	12%	7%	2%	15%	1%	100%
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	76%	12%	5%	2%	4%	1%	100%
Q10 意欲的に取り組んだ	83%	9%	4%	1%	3%	0%	100%

#### ・後期

前期の高い評価は、後期では更に上昇している。「とてもそう思う」に関して、80%未満が3項目から後期は1項目に減少し、前期存在しなかつ

た90%台が後期には5項目になっている。数値を見る限りにおいては、前期に引き続き、特別問題はないものと考える。教員は、分かりやすく、創意工夫された授業の創造と熱心な指導に意を尽くし、学生もそれに応えて自らの姿勢を律し、真剣に授業を受けている様子が伺える。

留学生一人ひとりの夢が実現することを祈念する。

表16-2 留学生2年（後期）

	とても思う	だいたい思う	どちらとも言えないと	思わない	思わない	思つたくない	無回答	
Q 1 この授業はわかりやすかった	91%	7%	1%	1%	1%	0%	100%	
Q 2 学習内容に興味や関心が持てた	88%	6%	2%	1%	3%	0%	100%	
Q 3 学習内容の分量は適切だった	92%	5%	1%	0%	1%	1%	100%	
Q 4 教員の教え方に工夫を感じられた	92%	5%	1%	0%	1%	1%	100%	
Q 5 教員は熱心に教えていた	92%	6%	1%	0%	1%	1%	100%	
Q 6 授業中どの学生にも公平に接していた	91%	6%	2%	0%	1%	1%	100%	
Q 7 いつも集中して聴けた	80%	14%	0%	0%	3%	2%	100%	
Q 8 私語をつづしんだ	78%	5%	3%	5%	7%	1%	100%	
Q 9 遅刻、欠席がないよう心がけた	82%	8%	2%	1%	6%	0%	100%	
Q10 意欲的に取り組んだ	86%	9%	1%	0%	3%	1%	100%	

## おわりに

本学の建学の精神である「自立・自活できる人材の育成」を達成するためには、教員の資質能力の向上は不可欠である。大学は、学術研究の中心として深く真理を探求し、専門の学芸を教授研究することを本質とするものであり、そのため従来は、研究活動に重心が置かれていた。しかし、少子化が進行し、大学全入時代を迎えた今日、学生の自己実現を図る「教育」の重要性が叫ばれるようになってきた。そして、学生の学力低下については全国的な問題となっており、入学前の補習授業を行う大学も増加傾向にある。

教員が授業内容・方法の改善に歓喜を絞り、指導力を向上させる組織的な取り組み(FD)が強調されはじめたのも最近のことである。個人の努力を求めて、組織的、継続的な努力が期待されている。

本学で、学生による授業評価を導入して10年が経

過した。教員は授業に関するPDCAを理解し、真摯な態度で反省、分析、対策を立て、実践し、着実にその成果を挙げてきている。特に、Q5（教員は熱心に教えていた）の項目については、毎年、前・後期とも最上位の肯定的評価となっており、その他の教員側に關係する項目もほとんどが高い評価を得ている。使命感に溢れ、強い教育的愛情をもったきめ細かい指導は殆どの学生に好意的に受け止められている証である。

今年度も、アンケート結果からは、例年並みのかなり高い水準の授業評価がみられ、学生も、大部分が教員の指導姿勢や授業に満足していることが推測される。教員にとって、高い評価からは「やる気」が醸成され、より高い次元での授業の創造へと希望も膨らむ。

一方、厳しい評価には少なからずショックを受けた。しかし、冷静に自己評価して改善の途を模索し、学生の期待に応え得る資質能力を身に付けなければならないことはいうまでもない。授業公開等FD研修の積極的な活動を推し進めることも、問題点の解決の一方策である。今回のアンケート結果が、明日の明るい途となることを期待する。